

# 「首陽山賦」論

——阮籍の「伯夷・叔齊批判」について——

柚木信枝

はじめに

阮籍は「<sup>注1</sup>隱逸」に批判的であつた。それは「大人先生伝」の大人先生と隱士との問答から明らかである。

隱士がこう言う。

現在の人間社会では、上古の質樸・淳厚の道は望むべくもなく、弱肉強食して価値観は倒錯してしまっている。それを見るに耐えず隱棲した。志の高さを顯わすためには、自然と共に禽のごとく生き、獸のごとく死ぬ覚悟も出来ている——

大人先生は隱士の生き方を否定して次のように応ずる。

若夫惡彼而好我、自是而非人、忿激以爭求、貴志而賤身、伊禽生而獸死、尚何顯而獲榮……薄安利以忘生、要求名以喪体、誠与彼其無詭、何枯槁而遁死、子之所好何足言哉

自分と俗人の間を「是」と「非」で区別し、現実社会に憤激し

て道を「求」めるため、「志」のために禽獸のごとき生活にもあまんじ、「名」のためには死をもいとわないというのか。「是非」や「名」などというものに自分を縛りつけて生きるのでは、俗人とかわりないではないか。そんな窮屈な生き方は御免だ。

これは福永光司氏の「大人先生の言葉に借りた、阮籍の隱逸者に対する批判<sup>注2</sup>」という指摘のとおりであろう。だが阮籍は「隱逸」を全面的に否定していたわけではない。隱士が見切りをつけた人間社会は、阮籍の置かれている現状であり、隱士の憤慨は阮籍の告発でもある。そうして、こうした汚濁しきつた社会からの離脱を彼が一つの「救い」として認めていたことも確かである。

それは「詠懷詩」に「上世の士」への憧憬として表わされている。「猗歟上世士、恬淡志安貧……巢由抗高節、從此適河浜」（其七十四）「園綺遯南岳、伯陽隱西戎……休哉上世士、万載垂清風」（其四十二）。ただし、阮籍が「上世の士」として認めているの

は「能く終を克する者」<sup>注3</sup>のみなのであって、同じ隠士でも餓死する破目に陥った伯夷・叔齊は、その点で失格であった。それでも詠懐詩では、首陽山は自分には住むことのかなわぬ平安の地として詠じられており、伯夷・叔齊の節義は一応認められている。

阮籍の作品の中で、夷斉説話を扱っているものに、この詠懐詩五首、「首陽山賦」の他にもう一つ「達莊論」がある。

「達莊論」は、老莊の哲学者たる阮籍がその論理を述べているものであるから、詠懐詩のように、論理と矛盾する本音を吐露するわけにはいかない。従って我を是とし、周を非として修身せんと首陽山に隠れた夷斉は批判をまぬがれない。だからここでは老莊の論理そのままの批判にとどまっている。

「首陽山賦」が「達莊論」の老莊の論理を基盤にしていることは確かである。しかしそれだけではない。「首陽山賦」の夷斉批判は、単に老莊批判にとどまらず、それまでの夷斉説話の矛盾点を突くことで、二人の言動のすべてを批判の対象にしている。阮籍はどういう意図を込めて、そのように徹底した批判をしたのであろうか。本稿では従来、触れられることすら稀であった「首陽山賦」の夷斉批判の実態を探ってみたい。

又、阮籍は対人の際に、「白眼」「青眼」を使い分けるような<sup>注4</sup>烈しい性格の持ち主であったにもかかわらず、権力者司馬昭から

「阮嗣宗は至慎なり。毎にこれと言ふに、言は皆な玄遠にして、未だ嘗て人物を臧否せず」<sup>注5</sup>と賞され乱世に天寿を全うした。そのような阮籍の生き方が、「夷斉批判」にどう反映されているか。その点も考えてみたい。

テキストは陳伯君校注『阮籍集校注』（中華書局）を使用した。又、「首陽山賦」読解にあたって沼口勝氏の「阮籍首陽山賦訳註初稿」『（山形大学紀要（人文科学））第十巻第三号 昭和五十九年一月）を参考にした。

## 一、阮籍について

### （一）「首陽山賦」の時代的背景

魏王室の三代目に幼少の斉王芳が即位すると、輔佐役の重臣、曹爽と司馬懿が実権争いを始めた。正始年間（二四〇―二四九）は、曹爽が司馬懿に名前だけの太傅の官職を与えて追いやり、権力を掌中にした。しかし曹爽政権が西征の失敗などで評判を落すや、司馬懿は、その子師と共に嘉平元年（二四九）正月、クーデターをおこし、実権を握る。嘉平三年に司馬懿は亡くなるが、その子の師・昭が権力を確固たるものにしていく。そして十数年間のうちに反対分子をつぎつぎと潰して、魏王朝を意のままにあやつるようになる。

嘉平六年（二五四）中書令李豐らが、司馬師を倒し、夏侯玄を大將軍に就けようと企てるが発覺して、主謀者は皆殺しにされる。

『世說新語』『方正篇』注引『魏氏春秋』によれば、曹爽派失脚の後、夏侯玄は「内に免がれざるを知り、人事と交はらず、筆研を蓄へず」と陰謀を仕組まれぬよう、政權争いに巻き込まれぬよう用心して幽居していたのだが、結局処刑されてしまったわけである。

また、この事件には齊王芳も加担していた疑いがもたれ、天子交替にまで發展する。そのため嘉平六年は正元元年と改められる。これが「首陽山賦」の詠まれた年なのである。

## （二） 阮籍の仕官歴

阮籍ははじめから身の安全のために仕官するといった消極的な政治参加を志していたわけではなかった。

昔年十四五、昔、年十四五のころ

志尚好詩書

志尚くして詩書を好む

被褐懷珠玉

褐を被て珠玉を懷き

顔閔相与期

顔閔相与に期す

と、「詠懷詩」其十五にみられるように、少年の頃は儒教的理想に燃え、世を救おうとする志を持っていた。だが彼が進んで仕官したいと思えるような為政者はあらわれなかったのだ。

阮籍は本を読み出したら、戸を閉めきって数カ月も外に出ず、

自然の中を徘徊すると幾日も帰るのを忘れる。その風変わりな行動から、人々は彼を「癡」と称していた。しかし世の信望厚い阮武が「自分に勝る者」と賞賛したので、仕官の誘いがたびたび寄せられるようになる。

兗州刺史王昶が彼との引見を望んだ折には、引見の間中、黙して語らず、王昶に仕える気のないことを示した。大尉蔣濟に招かれた時にも断つて帰ってくるが、蔣濟の怒りを恐れた親戚一同により任官させられる。これが三十三歳にしてはじめての就職である。しかし病を理由にすぐやめてしまう。

蔣濟は後に嘉平元年のクーデターの際には、司馬懿に味方し、懿に頼まれて「処分は免官のみであるから」と降伏を勧める手紙を曹爽に出す。<sup>注6</sup>曹爽はこれを信じて挙兵をやめ降伏するのだが、結局殺される。蔣濟自身は、曹爽の罪が軽減されることを懿に願っている程である<sup>注7</sup>から、処分は免官のみということを信じていたに違いない。この事件は阮籍が蔣濟のもとを辞して、かなり後におきたのだが、司馬氏に簡単に利用されてしまうような蔣濟の愚蒙さに、阮籍は初対面から気がついたのだろう。そのために仕官を渋ったのだと想像される。

曹爽の輔政就任後、参軍に召された時も、病を理由に辞して郷里にひきこもる。ほどなく嘉平元年のクーデターがおこり、曹爽

は殺されるので、阮籍は「先見の明あり」と人々に感服される。しかしこれは、クーデターで曹爽が敗れることを予見していたというより、二つの勢力が睨み合っている状況で、どちらか一方に付いて争いに巻き込まれたくないため辞退したと考えるのが妥当であろう。

クーデターの後には事態が一変し、もはや放胆に生きることが許されなくなった。対抗するものいなくなった司馬氏は縦いままに権力を行使し始め、阮籍は従事中郎とならざるを得なくなる。

司馬懿が亡くなり司馬師の代になってからもそのまま、大司馬従事中郎として司馬氏のそばにおり、そして高貴郷公即位後、関内侯に封ぜられ、散騎常侍になる。

司馬昭が輔政すると、阮籍は「籍平生より曾て東平に遊び、其の風土を楽しむ」(『晋書』阮籍伝)と進んで願ひ出る。そして東平に着くとすぐに官舎の壁や屏を壊し、外から内が一望出来るようにし、法令を清簡にすると、すぐ戻って来る。これは彼に出来る精一杯の司馬政権批判のパフォーマンスである。彼は「東平賦」にその国の腐敗ぶりを綿々と綴り、「司馬昭の臣下にあつては、東平の腐敗も好きになる」と皮肉を込めて述べている。

しかし阮籍の現実批判は、建前の裏に隠され、常に逃げ道を作っているため、睨まれはしても罰せられることはなかった。

東平から戻ると、大將軍である司馬昭の従事中郎に引き立てられるが、これ以上司馬氏に直接仕えるのは我慢ならず一計を案ずる。酒があるという理由で、求めて歩兵校尉となり、連日、泥酔する。しかしこれで自由を手に入れたわけではない。危険を充分認識した阮籍は、常に司馬昭幕下に出かけて行き朝廷の宴会には必ず参加したという。

このような阮籍の処世を『晋書』阮籍伝は次のように記述する。

籍本有濟世志、属魏晋之際、天下多故、名士少有全者、籍

由是不与世事、遂酣飲為常。

臣下でありつづけながら、酒を飲んで「世事に与から」なかった。

以上が阮籍の任官歴である。「濟世の志」に沿って身や処すつもりであったのが、司馬氏の権力掌握によって、自分の身の安全を守るため、屈して臣下であり続けねばならなかったのである。

しかし、もちろん酒に逃避するばかりではなかった。出来るところでは精一杯の抵抗もしている。それは東平での態度からもうかがえる。又、司馬昭が、その息子司馬炎と阮籍の娘との婚姻を求めてきた際には、六十日間酔い続けて返事を延し、ついに話を中止させているのである。これらは阮籍の不屈の精神を端的に表わしている。

## 二、「首陽山賦」について

### (一) 「首陽山賦」序文

「首陽山賦」は、当時の政治情勢を暗に批判したものであることが、その序文よりうかがえる。

正元元年秋、余尚為中郎、在大將軍府、独往南牆下北望首陽山、作賦曰、

(正元元年の秋、余尚は中郎為りて、大將軍の府に在り、独り南牆の下に往きて北に首陽山を望む。賦を作りて曰く)

正元元年は嘉平六年でもある。ところが、嘉平六年冬十月に高貴郷公は齊王芳に代って即位したのだから、正元元年秋は実際には存在しない。阮籍はなぜ「嘉平六年秋」としなかったのだろうか。

本文が初句「在茲年之末歲兮」通りに創作されたとすると、序文は本文を書いた後に追記された可能性が大きい。そして正元年間になってから序文を追記したので間違えたのだとも想像されるが矛盾を覚悟の上で、「嘉平」ではなく、司馬氏の手によって成立したはじめての元号「正元」を用いたとしたら、それはすべてが司馬氏の勢力に飲み込まれようとした当時の社会情勢を示すためではなかったろうか。

嘉平六年の事件を表面的に見れば、李豊、夏侯玄らは司馬氏顛

覆を謀ったが故に誅され、齊王芳はその淫行故に廃されたということになる。しかし『三国志』魏書・夏侯玄伝注引『魏略』による<sup>注8</sup>と、どうやら李豊らの謀議は司馬氏の捏造であったというのが事実らしい。扱いくなくなった天子を廃するために架空の事件を立て、ついでに気の染まぬ人物も始末してしまったということになる。

阮籍も、この氣に染まぬ人物の該当者になる可能性があった。李豊事件の延長で殺された許允の妻は、阮籍の身内である。又、夏侯玄がその「弁楽論」に、阮籍の「楽論」の一節を使用していることから、二人はあながち知らぬ仲でもなかったとも考えられる。

「余尚為中郎」の「尚」は、陳白君の注にあるように、高貴郷公即位後は、関内侯に封ぜられ、散騎常侍に徙ったが、「正元元年秋」にはまだ旧職にあったことを意味しているだろう。しかしそれはまた「自分が司馬氏の直属の部下であることへの憂慮を込めて使われている」といったら、穿ちすぎであろうか。

### (二) 「首陽山賦」の首陽山を眺める前の部分

在茲年之末歲兮

茲の年の末歲に在り

端旬首而重陰

端に旬の首めに<sup>はじ</sup>て重陰あり

風飄回以曲至兮

風は飄回して曲至し

雨旋轉而潑襟 雨に旋轉して潑襟す

蟋蟀鳴于東房兮 蟋蟀は東房に鳴き

鵲鳩号乎西林 鵲鳩は西林に号く

時將暮而無儔兮 時將に暮れんとして儔とも無く

慮悽愴而感心 慮は悽愴として心に感ず

茲の年の末歳は、齊王芳が廃位させられた正元元年の末である。

「重陰」は「達莊論」の「是以重陰・雷電、非異出也」では、単に雨天を示すものとして使われているが、「詠懷詩」其九「玄雲起重陰」では、黄節の注によると「世情の暗さ」を表わしている。ここでも同様であろう。

「飄回」「旋轉」の並記は回るイメージを強調し、天子の交替を彷彿させる。そしてその交替により、我身への風当りは強くなり、じっとり雨に濡れてしまった、と言っている。

「蟋蟀」は「詠懷詩」其十四「蟋蟀鳴牀帷、感物懷殷憂」、其二十四「殷憂令志結……蟋蟀在戶牖」のように、「殷憂」と並行して使われており、阮籍にとっては憂を殷ますものであった。又、「鵲鳩」の鳴き声は「楚辞」離騷に「夫れ百草をして芳しからずと為さしむ」とあり、やはり忌むべきものである。

こうしたマイナスイメージを重ねることで、陰湿な世相への嫌悪感を表現している。

振沙衣而出門兮 沙衣を振りて門を出れば

纓委絶而靡尋 纓の委すは絶たれて尋ぬる靡し

步徙倚以遥思兮 歩んで徙倚して遥に思ふ

喟歎息而微吟 喟なげき歎息して微吟す

將修飭而欲往兮 將に修飭して往かんと欲すれども

衆蹉跎而笑人 衆蹉跎として人を笑ふ

静寂寞而独立兮 静に寂寞として独り立ち

亮孤植而靡因 亮に孤植すれども因るところ靡し

懷分索之情一兮 分索の情の一になるを懷ひ

穢群偽之乱真 群偽の真を乱すを穢む

信可宝而弗離兮 信に宝ぶべきにして離れず

寧高拳而自擯 寧ぞ高く拳げて自ら擯ける

内司服に付着した世塵を払って出仕しようとするのだが、出仕を憂うつに思う気持ちの表れなのか、冠の紐が断ち切れている。

「步徙倚以遥思」は、『楚辞』遠遊の語句そのままである。『楚辞』の王逸注には「東西を彷徨す、意は愁憤なり」という。「愁憤」は、醜惡な世の中と意に染まぬ任官によって生じたものである。阮籍は同じ語句を使うことによって、司馬氏の臣下でいなければならぬ嘆きを表わしている。

「衆」という語は、阮籍の孤独感が広い視点で社会的に捉えら

れていることを示すものである。世の人間がみな競って司馬氏に任官したがった当時において、阮籍の苦悩は人々の笑い種にしかない。

「寂寞」は老莊思想に基づく。『莊子』刻意篇では「夫れ恬憺寂寞、虚無無為は、此れ天地の平にして道德の質なり」と、憧憬するに余りある境地として描かれている。「莊老を好む」(『晋書』阮籍伝)と言われている阮籍においても、「寂寞」は自己の精神を安定させる境地として、その多くの作品中に、たびたび登場する。<sup>注9</sup>

「孤植」の「植」は、『楚辞』招魂の注に「植志也」とある。阮籍の志は、出来るだけ「群偽」を糾弾することであった。だが、人々の心はばらばらで、同志の士は一人もいず、疎外感が胸に迫る。

阮籍の「真」は、其七十四「玄来味道真、道真信可娛」のように「道真」が多い。詠懐詩其四十二「保身念道真」というように「道真」は「保身」して求めるものなのである。だから「高く挙げて自ら憚く」行為が、命取りにもなりかねない当時においては、幽居などするわけにはいかないのである。

世の中が偽善や陰謀によって暗黒である様を描写し、保身のためにはこんな世に屈して仕官もしなければならぬ、そうしなければ乱世に道真は求められないのだと続けている。

### (三) 伯夷・叔斉像

伯夷・叔斉の実在は認められていない。河南嵩嶽の嶽神であり姜姓諸族の祖神である伯夷を起源とするという説や、<sup>注10</sup>古代の原始民族における末子相続に関する説話を原型とする説など、<sup>注11</sup>夷斉説話の起源については諸説さまざまである。

それらの説話はやがて儒家の手に渡り、ここで伯夷・叔斉は慷慨の士に昇格する。『論語』には四度登場しているが、いずれにおいても、その「仁徳」「志の高さ」がほめたたえられている。

一、子曰、伯夷・叔斉、不念旧惡。怨是用希。(公冶長第五)

二、伯夷・叔斉何人也。曰、古之賢人也。曰、怨乎。曰、求仁而得仁。又何怨。(述而第七)

三、齊景公有馬千駟。死之日、民無德而称焉。伯夷・叔斉、

饑于首陽之下。民到于今称之。其斯之謂与。(季氏第十六)

四、逸民・伯夷・叔斉・虞仲・夷逸・朱張・柳下惠・少連。

子曰、不降其志、不辱其身、伯夷・叔斉与。謂柳下惠・少連、降志辱身矣。言中倫、行中慮。(微子第十八)

『論語』ではまだ政治的色彩は見られないが、『孟子』に移ると、伯夷は紂の時代の乱世に身を処する清廉潔白の政治家として位置付けられるようになる。そして暴君放伐に賛同する革命是認者としての姿も出てくる。これは下剋上の戦国時代の産物であろう。

春秋時代の孔子は周王室擁護の保守的立場にあったが、孟子の時代は周王朝の没落は目前に迫っており、周に代って王道を実施してくれる統一者を待ち望む気持ちから、伯夷は革命是認者となつてしまったと思われ<sup>注12</sup>る。

理想化された伯夷像も道家の手にかかると変貌する。『孟子』も公孫丑上においては伯夷を「隘<sup>かたくな</sup>」と評しているが、『莊子』の夷齊批判には及ぶべくもない。

『莊子』では、伯夷・叔齊は「名」のために生命を落とした愚者として扱われている。

伯夷死名於首陽之下、盜跖死利於東陵之上。二人者、所死不同、其於殘生傷性、均也。奚必伯夷之是、而盜跖之非乎。

#### （駢拇第八）

『論語』にあつて『孟子』では抹殺されていた「首陽山の下に飢える」故事や「叔齊」の名が、再登場しているところから『孟子』より忠実に『論語』を発展させたものと考えられる。夷が重要な『莊子』においてはじめて周への任官を拒否し、それが首陽山点での餓死に結びつくという形がでてくることである。二人はここでは革命否認者となっていることも見落としてはならない。

こうして変遷してきた夷齊説話は『史記』の伯夷列伝において一つの完成を見せている。この伯夷列伝のような夷齊説話が、最

終的にいつ、誰によって作られたのかは確かではない。又、『史記』は当時流布していた話をそのまま載せているのか、それとも司馬遷が手を加えたものなのかわからない。

この『史記』伯夷列伝では、伯夷・叔齊が直接武王を諫めていること、采薇して生命をつなげること、『莊子』の讓王篇の「推乱以易暴」を一層発展させた「采薇歌」の登場が新しい。

以下に『史記』の伯夷列伝を記しておく。

伯夷・叔齊、孤竹君の二子なり。父叔齊を立てんと欲す。

父の卒するに及んで、叔齊、伯夷に讓る。伯夷曰く、「父の命なり」と。遂くて逃れ去る。叔齊も亦立つことを肯ぜずして逃れゆく。国人、其の中子を立つ。是に於いて伯夷・叔齊西伯昌の善く老を養ふを聞き、蓋し往きて歸す。至るに及び、西伯卒す。武王木主を載せ、号して文王と為し、東に紂を伐つ、伯夷・叔齊馬を叩えて諫めて曰く「父死して葬らず、爰に干戈に及ぶ、孝と謂ふべけんや。臣を以て君を殺す、仁と謂ふべけんや」。左右之を兵さんと欲す。大公曰く「此義人なり」と。扶けて之を去らしむ。武王已に殷の乱を平し、天下周を宗とす。而して伯夷・叔齊之を恥じ、義として周の粟を食まず、首陽山に隠れ、薇を采りて之を食ふ。餓え且つ死するに及びて、歌を作る。其の辞に曰く「彼の西山に登りて、



其の薇を采る。暴を以て暴に易へ其の非を知らず、神農、虞、夏忽焉として没す。我安くにか適き帰さん。于嗟徂かん。命の衰えたるかな」と。遂くて首陽山に餓死す。

阮籍の生きた三国・魏・晋の時代に伯夷・叔斉に触れた文章や詩は五十を超えるが、<sup>注13</sup>そのほとんどは節義ある人物、又は憧憬すべき逸民という登場である。二人を批判するものも六篇ばかりあるが老荘思想の生命重視の立場に反するといった類型化されたもので伯夷・叔斉を通して独自の視点を披露したものはない。

阮籍の「達莊論」も老荘の論理を基盤としている。

含菽采薇、交餓而死、顔夷之窮也、是以名利之途開、則忠信之誠薄、是非之辞著、則醇厚之情燦也

餓死することによって「名利」を得るのは本当の忠信ではない。「首陽山賦」にも「達莊論」に似た部分があるがそれは後に述べる。

阮籍は他にも「詠懷詩」の中で五首伯夷・叔斉に触れている。

繁華有憔悴 繁華には憔悴有り

堂上生荆杞 堂上に荆杞を生ず

驅馬舍之去 馬を驅りてこれを捨てて去り

去上西山趾 去りて西山の趾に上る

一身不自保 一身すら自ら保てず

何況恋妻子 何ぞ況んや妻子を恋はんや (其三)

ここではまず、西山を隱棲の地として慕う気持ちが前提にありそれがかなわぬことで深い絶望感を述べている。ところが安住の地であるはずの西山も魏晋の権謀の時代においては俗塵にまみれているのだ。

步出上東門 歩んで上東門を出で

北望首陽岑 北に首陽の岑を望む

下有采薇士 下に采薇士有り

上有嘉樹林 上に嘉樹林有る

良辰在何許 良辰、何許に在るや

凝霜沾衣衿 凝霜、衣衿を沾らす

寒風振山崗 寒風、山崗を振がし

玄雲起重陰 玄雲、重陰を起こす

鳴雁飛南征 鳴雁、飛んで南に征き

鵙鴒發哀音 鵙鴒、哀音を發す

素質遊商声 素質は商声に遊り

悽愴傷我心 悽愴として我が心を傷める (其九)

古への采薇の士、嘉林を思い起こすが、良辰がどこかに潜んでしまった現在では、首陽山は、実にもの寂しい秋の訪れによる。

以上、詠懷詩の伯夷・叔斉像をまとめると、伯夷・叔斉を頭か

ら否定するのではなく、むしろ好尚を托してすらいる。が、偽善と謀略による醜惡な世情が続く限り、隠遁によって避けようとしたところで、それは平安を得る手段とはなりえず、身の安全にすら有効ではないと知り、身動きのならないことを悲しむ。このような展開は「達莊論」での批判的態度とは異なる。

これは「詠懷詩」と「達莊論」の目的が異なっていることによると思われる。吉川幸次郎氏も指摘されているところであるが、<sup>注14</sup>「達莊論」は老莊の論理を述べるためのものである。万物斉同を大人先生が説明するにあたって我を是とし、周を非として修身せんと首陽山に隠れた夷齊は批難されなければならない。それに対し詩は正直な心情の吐露である。理論では分かっているが、怨毒に満ちた世の中を非として、逃避を願はずにはいられない。しかし、冷静に考えれば、隠遁では身の安全は得られない。この行き場の無さを吐露しているのが詠懷詩なのだと考えてよいであろう。

#### 四 首陽山の描写

「首陽山賦」において夷齊に触れる前に、首陽山の様子を述べている。

聊仰首以広頼兮 聊か首を仰げて広く頼て

瞻首陽之岡岑 首陽の岡岑を瞻る

樹叢茂以傾倚兮 樹、叢茂して傾き倚り

紛蕭爽而揚音 紛れて蕭爽として音を揚げる

下崎嶇而無薄兮 下は崎嶇として薄るもの無く

上洞徹而無依 上は洞徹として依るもの無し

鳳翔過而不集兮 鳳は翔び過ぎて集まらず

鳴梟群而並栖 鳴梟は群れて並び栖む

颺遙逝而遠去兮 颺がりて遙かに逝きて遠く去るも

二老窮而來帰 二老窮して来帰す

阮籍は首陽山の險阻を言うことで、伯夷・叔斉が決して好んでやって来ようとした場所ではないことを指摘している。二人は節義のためとはいえ本当に進んで首陽山にやって来たのだろうか。なお、後漢の杜篤の「首陽山賦」においても、首陽山の險しさを述べることから歌い始められている。ただ、阮籍が杜篤に倣ったかどうかは不明である。

「二老窮」の「窮」は「達莊論」の「顔夷之窮」と通じる。二人は迷罔の倫ゆえに、窮して首陽山にやって来なければならず、餓死せねばならなかった。「首陽山賦」の最後、「荀道求之在細兮、焉子誕而多辞、且清虚以守神兮、豈慷慨而言之。」に言うように、二人が生命を重視し、身を慎んでいれば、窮することはなかったのだ。こうしてみると、「首陽山賦」は「達莊論」と同じ論理を持っていることが分かる。ただ「首陽山賦」における夷

齊批判はそれにとどまらない。

(五) 「首陽山賦」の夷齊批判

現実を踏まえた上で、伯夷・叔斉の故事を思い浮かべると、阮籍にはどうしても納得がいかない。

——権力者に反抗しても処罰されないで済むなどということがあろうか——

——殷に背を向け周に來たのに、今度は殷を攻めようとする周の挙兵にも不満で、隠棲してしまった。それを今まで人々は「仁義」と称してきたが、これがはたして「仁義」と呼べるものであろうか——

このように夷齊説話の矛盾点を突くことにより、「達莊論」とはまた違った夷齊批判へと発展していく。阮籍の権力者に対する現実的な觀察眼は、従来の伯夷・叔斉像をすっかり変えてしまうのである。

夷囚軋而処斯兮	実に囚軋されて斯に処る
焉暇豫而敢誹	焉んぞ暇豫ありて敢へて誹らん
嘉粟屏而不存兮	嘉き粟は屏 <small>しりぞ</small> けられて存ぜず
故而死採甘薇	故に死に甘んじて薇を採る
彼背殷而從昌兮	彼れは殷に背きて昌に従ひ
投危敗而弗遲	危敗に投じて遅れず

此進而不合兮

此は進んで合はさず

又何稱乎仁義

又何ぞ仁義に稱かなはん

伯夷・叔斉は実は囚われて車でここにつれてこられたのである。天祚を奪略せんとしている権力者が、その基盤のまだ固まらぬ間に反逆者を許して、「義人なり」とほめるほどの度量を示すはずがない。李豊や夏侯玄のように、反対派と目されただけで殺され、幽居が身を守る手段にもならないというのが現実なのだ。だから阮籍は、それまでの夷齊説話にはない、「囚軋」や「屏」という言葉を加えずにはいられなかった。また、前に述べたが「夷囚軋而処斯兮」の前の句で首陽山の險しさを描写しているのも、伯夷・叔斉が決して好んでやって來たとは考えられない場所なのだということを示して「囚軋」を裏付けているのである。

ここにおいて、伯夷・叔斉の仁義も、隱遁説も、采薇歌も否定される。夷齊説話は完全に碎かれ、価値觀の転倒がおきるのである。阮籍は物事を多角的視野に立って見つめた場合、それまでの一般的評価の偽妄が発覚し、真実が見えることがあると指摘しているのだ。これが序文の「正元元年秋」と結びつけられている。嘉平六年の事件が、実は司馬氏の陰謀から起きたものであることを夷齊説話を隠れ蓑にして糾弾しているのである。

察前載之是云兮

前載の是に云ふを察すれば

何美論之足慕

何ぞ美論の慕ふに足らんや

苟道求之在細兮

苟しくも道求むるは之れ細に在り

焉子誕而多辞

焉んぞ子誕にして辞多からんや

且清虚以守神兮

且く清虚して以って神を守り

豈慷慨而言之

豈に慷慨して之を言はんや

「首陽山賦」の最後の部分である。

嘘が真実として平然とまかり通る時代であって、阮籍は自らの価値観の転換を、迫られたのである。「何美論之足慕」はその表れである。首陽山が荆杞に覆われるのも同じであろう。そして阮籍はこう続ける。

正しい道理を求めようとするなら細心の注意が必要だ。「多辞」を慎しみ、心の中で思っていることをそのまま口に出して罰せられることのないようにしなければならない。炯眼を失ってはならないが、それを口に出す時には、非常に注意を払うべきである。

阮籍の賦の時代批判が、「東平賦」の風景描写に託せられたり、嘉平年間に飼っていた二羽の鳩が犬に殺されたから作ったという「鳩賦」のように動物に譬えられることにより、間接的になされているのはそのためであった。「首陽山賦」においても、夷斉批判は表向きで、真意は、名誉のために左右に走る人士に対する軽蔑、権力者司馬氏の狭量、陰計に対する反感が表わされているの

だ。

「首陽山賦」は伯夷・叔斉を批判するのが本当の目的ではなかったから、老荘思想通りの夷斉批判にはならなかったのである。もし伯夷・叔斉批判そのものが目的であったなら「大人先生伝」の隠士批判のような形になって続くのが当然であろう。

「首陽山賦」の夷斉は修身もせず、名誉のために、あっちに従い、こっちに味方する背反の徒として描かれている。これは当時の似非君子達への皮肉であり、同時に悪業が善業の評価を得ていることが現実にもあることへの糾弾でもあるだろう。

そんな善と悪との交替がいつも簡単に行われる時代だからこそ神を守り、清虚にして道真を求めるべきだ。そう『首陽山賦』は結んでいる。

ここまでくると、阮籍が権力者に対して示した「至慎」は、実は、道真を求めるに当って出来るだけ身の束縛を受けないようにするための手段だったことがわかる。阮籍においては「至慎」と「道真」は両立するものであった。

## 結 び

阮籍は現実を疎ましく思いながらも、そこから離脱することが不可能なことを、悲しいほど認識していた。そんな阮籍にとって

詠懷詩に理屈ぬきの真情を吐露し、「達莊論」等で理念に埋没することは、慰めになったにちがいない。胸にたまる現実社会への批判を間接的にせよ文章で述べることは、諦念して司馬氏政權に従わざるを得なかった状況から、阮籍の心を救済したといっても間違いないだろう。

しかし、嘉平六年の事件を機に、阮籍をここまで激しい夷齊批判に駆り立てたものは、彼の胸深くを脈々として流れていた不屈の精神であった。阮籍は人を扇動することを恐れて、その不屈の精神を、周囲の人にさえ語ることを抑えた。

阮籍の「保身」と「不屈の精神」の葛藤が、最もはっきり表われているのは、『晋書』阮籍伝の以下の部分である。

会帝讓九錫、公卿將勸進、使籍為其辭。籍沈醉忘作、臨詣府使取之、見籍方拋案醉眠、使者以告、籍便書案、使写之、無所改竄。辭甚清壯、為時所重。

司馬昭が晋公になって禪讓の第一歩をしるそうとしている時、阮籍はその先棒を担ぐ気など少しもなかった。だが勸進文を書くことを命ぜられて拒否出来るわけではない。かといって自分の気持ちを完全に偽るような行為も出来ない。勸進文を書くことは司馬氏に全く屈服してしまうことを意味するからである。そこで阮籍は出来る限りの抵抗を試みる。なかなか勸進文を提出しないので

ある。そして使者に催促されて、宿酔の頭で考えたふりをして机に書きつける。しかし出来上がった文は、一字も改める必要がない程の名文であった。阮籍は自分の気持ちに少しでも正直であろうとするために、進んで勸進文を書くわけではないことをこういう形で表明せずにはいられなかったのである。生きなければならぬという気持ちと、司馬氏に加担したくないという気持ちの狭間に立って、出来るだけどちらの気持ちにも正直であろうとする努力が、この故事に端的に出ている。

だからこそ阮籍は、ほぼ同時代の嵇叔良の作といわれる「魏散騎常侍步兵校尉東平太守碑」においても、「夷齊の潔を屑しとせず、故に其の清尚ぶべからざるなり、惠連の汚を履まず、故に其道屈すべからざるなり」と、単なる「清」ではなく、「不屈」の「道」の人として中道を歩もうとした点を評価されているのである。しかるに「首陽山賦」においては、「夷齊之潔」を徹底的に批判していて、中道のバランスを崩しているのではないかとも思われた。そのことへの不審の念が本稿の出発点だったが、不十分ながらも「首陽山賦」を検討してみることを通して得られた結論は、ここでの彼の夷齊批判の根底を成しているものは、「不屈の精神」とでも呼ぶべきものであったのではないということである。

注

注1 字は嗣宗、陳留尉氏（河南省尉氏県）の人。建安十五年（二一〇）

生、景元四年（二六三）五十四歳で卒す。

注2 福永光司「阮籍における懼れと慰め―阮籍の生活と思想―」（『東方学報』（京大）二八 一九五八）

注3 其四十二の黄節注「方東樹曰、上世士、即指園綺伯陽能克終者耳」による。

注4 『晋書』阮籍伝「籍又能為青白眼、見礼俗之士、以白眼对之」

注5 『世説新語』德行第一

注6 『三国志』魏書曹爽伝注引『世語』「蔣濟亦与書達宣王之旨、又便爽所信殿中校尉尹大目詣爽唯免官而已、以洛水為誓、爽之、罷兵」

注7 『晋書』宣帝紀一「蔣濟曰、曹真之勲、不可以不祀、帝不聽」

注8 「豊為中書二歳、帝比每独召与語、不知所説、景王知其議已、請豊、豊不以夷告、乃殺之、其秘」

注9 「詠懷詩」其六十三では「寂寞使心憂」だが、「彼玄真之所宝兮、樂寂寞之無知」、（『東平賦』）「故寂寞者德之主」、（『通易論』）「清淨寂寞、空豁以俟、善惡莫之分、是非無所争」、（『達莊論』）そして「清思賦」でも「微妙無形、寂寞無聴」と、寂寞の境地は理想的なものとしてうたわれている。

注10 白川静『中国の古代文学（二）』（中央公論社、'76）にて「伯夷はもと、嵩嶽の嶽神」であつたとされている

注11 石田公道『伯夷叔斉伝説考』（『人文論究』第一号、'50）

注12 「伯夷・叔斉の物語りは戦国に入り、周王朝が崩解しやがて興るべき統一の為に説かれなければならなくなつた為、改変せられてついに革命を是認する為の手段として、大きな役割を擔わされることとなつた（注11に同じ）を参考とする。

注13 丁福保『全漢三国晋南北朝詩』遼欽立『先秦魏晋南北朝詩』嚴可均『全上古三代秦漢三国六朝文』より三国時代の詩文、及び少し時代を拡げて『文選』より「伯夷・叔斉（叔斉・夷叔）」『西山』

「首陽」「采薇（採薇）」の語を含む詩文を、夷斉説話に触れるものとして選出した。

注14

「散文は、少なくとも阮籍の場合、論理のためのものであり、矛盾分裂は嚴密にさけられねばならない。それに反し、詩は、阮籍の場合に於いても、より軽快な表現方式であつた」吉川幸次郎「阮籍の『詠懷詩』について」（吉川幸次郎全集第七巻・筑摩書房）

（ゆのき のぶえ 一九八九年日文卒）